

専任教員教育研究業績

平成28年6月10日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
菊地 篤子	きくちあつこ	保 育 学 科	学科長 教授・准教授 助教	男・女
担 当 科 目 名			学内委員会等(委員長)	
「人間関係指導演」「乳児保育Ⅰ」「保育実習指導Ⅰ」「保育実習指導Ⅱ」「保育実習Ⅰ」「保育実習Ⅱ」「卒業研究(ゼミナール)」			入試募集委員	
学 歴				
和暦(西暦)年 月	事 項			学位
平成6年3月	京都女子大学家政学部児童学科卒業			学士(家政学)
平成8年3月	大妻女子大学大学院家政学研究科児童学専攻(修士課程)修了			修士(家政学)
教 育 歴 ・ 職 歴				
名 称	期 間	教育内容又は業務内容		
静岡県立伊豆中央高等学校非常勤講師	平成8年4月～平成10年3月	「家庭科」担当		
静岡県立沼津西高等学校非常勤講師	平成8年4月～平成10年3月	「家庭科」担当		
静岡県三島市健康推進課保健センター委託職員	平成9年4月～平成18年3月	乳幼児心理相談員		
静岡県田方郡函南町保健センター委託職員	平成10年4月～平成12年3月	三歳児健診心理相談員		
小田原女子短期大学家政学科非常勤講師	平成10年4月～平成15年3月	「家庭保育」担当		
静岡県田方郡修善寺町健康増進課保健センター委託職員	平成11年4月～平成16年3月	乳幼児心理相談員		
小田原女子短期大学保育学科非常勤講師	平成13年4月～平成24年3月	「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」担当		
静岡県田方郡中伊豆町健康増進課保健センター委託職員	平成15年4月～平成16年3月	三歳児健診心理相談員		
静岡県伊東市保健センター委託職員	平成15年4月～平成16年3月	二歳児健診心理相談員		
静岡県伊豆市健康増進課委託職員	平成16年4月～平成24年3月	乳幼児心理相談員		
小田原女子短期大学保育学科非常勤講師	平成21年4月～平成22年3月	「環境指導演」担当		
横浜国際福祉専門学校非常勤講師	平成17年4月～平成18年3月	「人間関係」担当		
近畿大学豊岡短期大学通信教育部非常勤講師	平成17年4月～平成18年3月	「人間関係」担当		
静岡県伊豆市教育委員会学校教育課委託職員	平成19年4月～現在に至る	巡回相談員		
静岡県伊豆市教育委員会学校教育課	平成22年4月～平成24年3月	特別支援教育コーディネーター		
小田原女子短期大学(現:小田原短期大学)保育学科准教授	平成24年4月～現在に至る	「人間関係指導演」「乳児保育Ⅰ」「保育実習指導Ⅰ」「保育実習指導Ⅱ」「保育実習Ⅰ」「保育実習Ⅱ」「卒業研究(ゼミナール)」担当		

所 属 学 会 等		
名 称	活動期間	活動内容 (役職等の活動を含む)
日本保育学会	平成8年～現在	正会員
日本家政学会	平成8年～現在	正会員
日本発達心理学会	平成13年～現在	正会員
日本臨床発達心理士会	平成16年～現在	臨床発達心理士正会員

社 会 活 動 等		
名 称	活動期間	活 動 内 容
大妻女子大学家政学部附属 児童臨床研究センター研究 協力員	平成8年4月～現在	研究協力員
静岡県伊豆市教育委員会 就学支援委員	平成16年4月～現在	副委員長
静岡県伊豆市教育委員会 特別支援教育専門家チーム 会議委員	平成21年4月～平成24 年3月	委員
静岡県伊豆市こども課 要 保護児童対策地域連絡協議 会委員	平成20年4月～現在	委員
小田原市おだわら男女共同 参画プラン策定検討委員会 委員	平成26年4月～平成28 年3月	委員 (有識者)

担 当 教 科 目 に 関 す る 資 格 ・ 免 許 等		
名 称	取得年月	取 得 機 関
幼稚園教諭一種免許	平成6年3月	京都府教育委員会
中学校教諭一種 (家庭科)	平成6年3月	京都府教育委員会
高等学校教諭一種 (家庭科)	平成6年3月	京都府教育委員会
社会教育主事任用資格	平成6年3月	京都女子大学
保母資格 (現保育士)	平成6年10 月	京都府
幼稚園教諭専修免許	平成8年3月	東京都教育委員会
臨床発達心理士	平成16年 2月	臨床発達心理士認定機構

研 究 実 績 に 関 す る 事 項				
代表的な著書、論 文等の名称	単 著 共 著の別	発行又は発 表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 育つ・育てる	共著	平成15年4 月	健帛社	乳幼児の「育つ・育てる」という領域に関する多様な 視点を、親子理解と支援・発達理解・子ども理解・反 抗期・育ちの現場・現代の課題などとして整理・理論 化した学術書である。全215頁 編著者：千羽喜代子・ 山崖俊子 共著者：池田りな・長山篤子・菊地篤子・ 帆足暁子・星順子・矢内由 本人担当部分：「第5章 第一反抗期を再考する」(p.95 ～120) 乳児保育期に表出し始める第一反抗期について、筆 者は「自己主張不的確期」と考え、第一反抗期とは、 子どもの社会性やことばの発達段階と照合して、その 時期独特の発達段階から表出される自己主張の姿で ある、という理論を展開した。そして、家庭内の人間関 係場面で、自己主張から現れる反抗の表現を①反抗の 始まり、②弟の誕生と反抗の多様化、③自立の進行と反

<p>2. 子どもの心の育ちと人間関係 一人を育てるためのかかわりと援助ー</p> <p>3. 乳児保育</p> <p>4. 保育内容「人間関係」</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>平成 21 年 9 月</p> <p>平成 25 年 4 月</p> <p>平成 26 年 3 月</p>	<p>保育出版社</p> <p>大学図書出版</p> <p>大学図書出版</p>	<p>抗、の3段階に分けて段階的に分析した。更に、縦断的事例を取り上げ、反抗の表れを紹介・分析した。また、日米間の反抗期の受け止め方、関わり方の違いなどを紹介し、その後の幼児教育期のスムーズな人間関係の育ちのために配慮すべき要点を整理した。</p> <p>「保育者にしてもらおうことを受け入れ喜ぶ (2 歳児)」 「まねっこや見立て・つもりを楽しむ」(2 歳児)「ルールが理解できなかったり守れない」(気になる子ども)の項目を執筆担当した。</p> <p>第6章「乳児保育のネットワーク」(p.50~59) 乳児保育のテキストである。筆者は、乳児をとりまく様々な人や機関の役割について執筆した。専門職である保育士の在り方、保育所と各専門機関との連携、そして家庭と保育所の連携について、事例を交えて整理した。</p> <p>第2章『乳児期における「人間関係」』(p.18~35) 幼稚園教育要領の5領域のひとつである「人間関係」のテキストである。筆者は、3歳未満児の二兎とのかかわりの育ちの過程と、かかわる大人や子どもの在り方について執筆担当した。</p>
<p>(学術論文)</p> <p>1. 保育を営む者とその支援者</p> <p>2. 広汎性発達障害をもつ子とその母親への援助</p> <p>3. ふたりきょうだい育児をする母親がとらえる「下の子らしさ」</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>単著</p>	<p>平成 15 年 3 月</p> <p>平成 16 年 3 月</p> <p>平成 18 年 3 月</p>	<p>小田原女子短期大学研究紀要第 33 号 p.33~40</p> <p>小田原女子短期大学研究紀要, 第 34 号 p.50~56</p> <p>小田原女子短期大学研究紀要, 第 36 号 p.55~62</p>	<p>子どもを取りまく大人の人間関係の表れの一つである子育て支援を、「子育てを営む者」と「支援者」という枠組みで捉え、相互関係や広義の支援、支援の意義等について分析した。支援は、その質・タイミングを計ることで営む者にとって本当の意味での支援となること、一方、支援を受ける者も、自らの許容範囲を把握する大切さを示した。特に乳児保育期は、支援の質を保つことに留意することが重視された。広義の支援機関とは、子どもが生活し、その家族が子どもとともに利用する場所全般を指し、また支援者とは、支援機関に従事する者全てを指す、と分析し、子育ては社会の様々な人や機関に支えられていることを考察した。</p> <p>共著者：菊地篤子・井戸ゆかり 本人担当部分：子育て支援の体制の整理と分類、支援の在り方に関する考察を担当し、論文として全てを著した。</p> <p>発達の遅れを指摘された幼児に対する行政の健診事後教室・園生活等での周囲の大人の人間関係を心理相談員の立場で実践研究した報告である。2年8カ月間の教室参加と発達検査、個別相談や事例検討会議を通して、対象児の特性を捉え、支援方法を模索した。そして、乳児保育期から4歳までの対象児の育児・保育方法を母親・保育士に伝え、幼児支援の方策を記した。また、実際にこの事例に携わった保健師などの専門職と母親・保育士の連携体制、さらに、園の保育士と家庭の保護者の意志疎通のための留意点などの課題を示した。</p> <p>共著者：菊地篤子・井戸ゆかり 本人担当部分：実践すべてを担当し、論文として整理、分析を行い、全てを著した。</p> <p>日本の家族構成では、子どものきょうだい数の実態として、ふたりきょうだいが割的に多いことを紹介し、ふたりきょうだい育児を経験した母親の第二子に対する育児姿勢と第二子への思いをインタビューして、母親が感じる「下の子らしさ」を探った。事前調査と事例研究から、家庭内における子どもの同士の人間</p>

<p>4. 「乳児保育」に対する学生の意識調査—魅力と困難さに関する一考察—</p> <p>5. 「地域子育てひろばを活用した乳幼児家庭全戸支援（1）—小田原モデルの研究と試行—」</p> <p>6. 「男女共同参画企画としての子育て講座で扱う内容の検討～12年間の変遷～」</p>	<p>単著</p> <p>共著</p> <p>単著</p>	<p>平成 26 年 3 月</p> <p>平成 27 年 3 月</p> <p>平成 28 年 3 月</p>	<p>小田原女子短期大学研究紀要, 第 44 号 p.24～34</p> <p>小田原短期大学研究紀要第 45 号 p.50～63</p> <p>児童学研究（日本家政学会児童学部会）第 40 号 p.21～28</p>	<p>関係を整理し、きょうだい育児における生活背景の違い、第一子が比較対象となること、また母親の精神的ゆとりから、子の性質の捉え方に違いが生じることを考察した。中でも、母親に第一子を育てた経験から形成された「子ども理解」や「育児への認識」が、第一子との相違点を「下の子らしさ」と捉えることが考察された。</p> <p>筆者が担当する「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」の授業において、学生が感じる乳児保育の魅力と困難さについて、履修前と履修後にアンケートを実施し、意識調査した。</p> <p>子育てひろばへの導入として開催する乳児向けの「赤ちゃんひろば」の小田原市における試行と本学独自プログラムについての共同論文の中で、赤ちゃんとの生活の工夫と理論、赤ちゃんひろばでの親子活動プログラムについて担当した。</p> <p>筆者が担当する男女共同参画企画の園出前子育て講座について、1 度の受講でも参加者の有意義な学習機会となり得る内容を検討するために、これまでの講座内容を話題別、時期区分別に整理、分析した。また、主催者、開催園、参加者のニーズや傾向を探り今後の話題の核となる内容を探究した。</p>
<p>(その他) 「報告書」</p> <p>1. 子育て支援センターにおけるボランティア活動を通じた次世代育成</p> <p>2. 静岡県三島市男女共同参画幼稚園保育園出前講座アンケート調査報告書</p> <p>3. 静岡県伊豆市男女共同参画出前講座アンケート</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>平成 24 年 3 月</p> <p>平成 16 年 1 月～毎年度 1～2 回</p> <p>平成 23 年 5 月～毎年度 1 回</p>	<p>平成 24 年度かながわ子ども・子育て支援推進調査研究事業費補助金報告</p> <p>静岡県三島市政策企画課</p> <p>静岡県伊豆市総務部地域づくり課</p>	<p>少子化や、若者が乳幼児と知り合う機会の希薄さなどの課題解決の一助として、子育て支援センターにおける、中高生や大学生のボランティア活動参加支援を行った報告である。 全 58 頁 研究代表者：吉田眞理 共同研究者：石井栄子・菊地篤子・宮川萬寿美・市野繁子・小田原市子育て政策課・マロニエ子育て支援センター 本人担当部分：4 研修テキストの全体構成案と内容案 (2)赤ちゃん(乳児)の育ちとあそび、5 研修実施報告(1)②研修の様子(2)②研修の様子 p.17～20、p.45,46,50</p> <p>乳児保育期の 0 歳～2 歳までの姿を、全体的発達面・運動面・親子の人間関係を始めとする社会性の発達面などを中心に年齢ごとに整理し、具体的な生活場面や遊びを著した。</p> <p>静岡県三島市内の幼稚園や保育園で毎年実施し、筆者が講師を担当している男女共同参画出前講座「みんな子育て」で実施しているアンケート調査の報告書である。家庭内人間関係構築のための「男女共同参画」ということばの認知度、性別役割分担に対する意識調査、各家庭内での役割分業についての実態調査、講座内容への意見等を毎回調査集計し、報告している。</p> <p>静岡県伊豆市内の幼稚園や保育園で毎年実施し、筆者が講師を担当している男女共同参画出前講座「みんな子育て」で実施しているアンケート調査の報告書</p>

<p>ト調査報告書</p> <p>「テキスト執筆」 1.みんなで支える・わたしが輝く「子育て支援ひろば」</p>	<p>共著</p>	<p>平成 24 年 3 月</p>	<p>小田原女子短期大学保育学科編</p>	<p>である。家庭内人間関係構築のための「男女共同参画」ということばの認知度、性別役割分担に対する意識調査、各家庭内での役割分業についての実態調査、講座内容への意見等を毎回調査集計し、報告している。</p> <p>中高生や大学生が子どもにかかわるボランティア活動に参加するときに必要な基礎知識を紹介した。誕生前から4歳過ぎまでの育ちの概要、親子への関わり方、小田原市の子育て支援ネットワークの紹介などを記した。全76頁 共同執筆者：宮川萬寿美・菊地篤子・吉田眞理他 本人担当部分：第2章 「はじめまして！赤ちゃん」 p.15～24</p> <p>乳児保育期の0歳～2歳までの乳幼児の姿を、全体的発達面・運動面・親子の人間関係等の社会性の発達面などを中心に、生活場面や遊びを年齢ごとに整理、紹介した。</p>
<p>「学会発表」 1.幼児期におけるふたりきょうだいの第二子の生活実態に関する事例的研究</p>	<p>単独</p>	<p>平成 17 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 58 回大会（大妻女子大学）要旨集 p.972～973</p>	<p>家庭内での子ども同士や親子の人間関係を整理し、第二子の生活実態をふたりきょうだい育児を経験した母親にインタビューして、第二子の特性を探り、母親からみた「下のらしさ」を探った。「下の子らしさ」は要領の良さなどの依存的な面と、手がかからず自立した面を併せ持っていることが解った。第二子の生活力は、親を独占する機会がなく、生まれながらの競争社会で培われ、また親自身も「育児経験者」で要領をつかんでいることが多い。「下の子の生活力」は家族関係の中で「下の子らしさ」と「親の育児姿勢」の相乗効果の中で形成されたものである、と考察された。</p>
<p>2.学生が意欲的に取り組んだ領域「人間関係」の演習テーマ</p>	<p>単独</p>	<p>平成 21 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 62 回大会（千葉大学）要旨集 p.299</p>	<p>短期大学生が意欲的に取り組み、知識や保育技術を習得しやすい演習テーマや授業構成を調査・検討した。保育者を志す学生に、演習終了時に意欲的に取り組んだ演習とそうでない演習をアンケート調査・分析した結果、特別支援教育やジェンダーフリーの観点に関する演習が印象深い傾向が強かった。一方、理論や知識の習得が主となる演習は印象に残りにくく、授業の組み立て方を再検討することが課題とされた。また、体験的な演習や活動の上に、理論を展開・定着できる演習テーマを模索することが提起された。</p>
<p>3.子育て講座のテーマ～男女共同参画の視点より～</p>	<p>単独</p>	<p>平成 26 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 67 回大会（大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学）要旨集 p.851</p>	<p>静岡県下の行政主催の男女共同参画企画子育て講座を11年間担当してきた中で、講座内容の変遷と取り上げるべきテーマの省察、今後への展望を発表した。</p>
<p>4. 子育て講座のテーマ第2報～男女共同参画講座参加者の意識調査～</p>	<p>単独</p>	<p>平成 27 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 68 回大会（椋山女学園大学）</p>	<p>第67回大会の続報。講座参加者の事後アンケートを分析し、講座テーマを検討した。その中で、男女共同参画とという語句が浸透していない中でも、講座の内容は共感できた意見が多く、啓発の意義が明らかになった。</p>

<p>「小冊子」 1 静岡県伊豆市特別支援教育支援員研修小冊子</p>	<p>単独</p>	<p>平成 23 年 8 月</p>	<p>静岡県伊豆市教育委員会学校教育課</p>	<p>筆者が立案主催した、市内の幼稚園保育園こども園小中学校の各種支援員の研修に用いられた小冊子。支援員の役割・事例検討・記録の取り方・対象児と支援員の人間関係や、支援員と教員や保育者との人間関係などの内容で作成された。</p>
<p>2 赤ちゃんを育て始めたあなたへ 子育て応援ブック</p>	<p>共著</p>	<p>平成 27 年 6 月</p>	<p>小田原短期大学</p>	<p>「赤ちゃん快適に暮らす」 p.26~27 赤ちゃん快適に暮らすための工夫やコツを紹介した。</p>
<p>「リーフレット」 1.静岡県三島市幼稚園男女共同参画出前講座</p>	<p>共著</p>	<p>平成 14 年から毎年 1~2 回</p>	<p>静岡県三島市総務部(現:政策企画課)</p>	<p>年 1~2 回の頻度で、静岡県三島市内の幼稚園または保育園に出向き、男女共同参画出前講座を実施する際のリーフレットである。「みんなで子育て」というタイトルの、保育参観に合わせた保護者対象の講座で、世論や子育て事情の変化に合わせて、サブタイトルを改訂している。</p>
<p>2.静岡県伊豆市男女共同参画出前講座</p>	<p>単独</p>	<p>平成 20 年 1 月から毎年 1 回</p>	<p>静岡県伊豆市総務部(地域づくり課)</p>	<p>年 1 回静岡県伊豆市内の幼稚園または保育園に出向き、男女共同参画出前講座を実施する際のリーフレットである。「みんなで子育て」というタイトルで、保育参観に合わせた保護者対象の講座である。世論や子育て事情の変化に合わせて、サブタイトルを改訂している。</p>
<p>3.小田原女子短期大学リカレント講座</p>	<p>共著</p>	<p>平成 24 年 8 月</p>	<p>小田原女子短期大学保育学科</p>	<p>「身体を手がかりにした発達支援Ⅱ『乳幼児の模倣行為』～まねっこ上手は育ち上手～」という講座のリーフレットである。乳児保育期からの発達過程・目と身体の協応の必要性、人間関係の中から自然発生する模倣活動、子どもの望ましい模倣活動についてなどを整理した。</p>
<p>4.静岡県教職員組合田方支部教員研修男女共同参画推進学習会</p>	<p>単独</p>	<p>平成 24 年 11 月</p>	<p>静岡県教職員組合田方支部</p>	<p>小中学校教員を対象とした「子どもの生活を創る礎」という講座のリーフレットである。①家庭での男女共同参画意識②親の役割③育ちの予先など、教育現場と家庭で各人が各方向に対する人間関係を意識し、生活に参加する意欲を育成する方法について、演習資料を含めて作成された。</p>
<p>5.神奈川県小田原市情報紙おだわらの風</p>	<p>共著</p>	<p>平成 25 年 2 月</p>	<p>神奈川県小田原市市民部人権・男女共同参画課</p>	<p>男女共同参画社会の実現を目指した情報紙。「イクメン」とは何かをテーマに、ことばの整理や一般市民へのインタビューをした。筆者は家庭での性別役割分担の歴史的背景と昨今の社会での捉えられ方、今後への展望等の意見を記した。特に、子育ての、家庭内での家族全体の人間関係の在り方を再考し、子どもに対し、適切でバランス良いかわり方が求められるとした。</p>
<p>その他 (表彰等)</p>	<p>年 月 年 月</p>	<p>特になし</p>		